

日本学術会議 薬学委員会
第 24 期・第 6 回 化学・物理系薬学分科会
議事要旨

日時 令和元年 11 月 26 日(火) 14:00 ～ 16:00

場所 日本学術会議 5 階会議室

出席者 嶋田委員長、永次副委員長、佐治幹事、樋口幹事、内山委員、加藤委員、
上村委員、寺田委員、徳山委員、長野委員、真鍋委員、山縣委員

欠席者 井上委員、尾野村委員、齋藤委員

陪席 日本学術会議事務局

配布資料 資料 1：第 24 期・第 5 回薬学委員会 化学・物理系薬学分科会 議事録

資料 2：2019 年 10 月 16-17 日開催学術会議総会での薬学委員会

資料 3：薬学委員会（化学・物理系分科会）

資料 4-1：土曜日・日曜日及び祝日における講演会、シンポジウム等の開催について

資料 4-2：講演会、シンポジウム等主催提案書

資料 5-1：次回主催シンポジウム開催に関する真鍋委員のメール連絡内容

資料 5-2：次回主催シンポジウムの講演案リスト

議事

(1) 前回の議事要旨の確認が行われた。

(2) 2019 年 10 月 16-17 日開催日本学術会議総会での薬学委員会

- ・ 日本の展望 2020 について

2030年、2050年での姿を考えて、我が国が今後直面する重要課題とその解決に向けた学術活動についての展望「日本の展望2020」について令和2年（来年）3月を目途に出版を予定しており（令和2年4月総会での公表を予定）、現在執筆者、記載する項目の決定がなされている状態である。なお、日本の展望は10年ごとに学術会議から提案されており、前回の「日本の展望2010」では長野委員が関わられた。

- ・ 25 期改選について

2020 年 10 月からの次期の会員、連携会員の推薦を全会員・連携会員に依頼（令和 2 年 2 月上旬 〆切）。

- ・ 第 24 期提言・報告の作成・提出について

提言・報告をまとめる予定の委員会においては、第二部査読のために、提言の案は分野別委員会による査読を済ませて、事務局へ来年（令和 2 年）2 月末日までに提出。

- ・ 予算について

昨年度、今年度の年度後半での予算逼迫に対する反省から、予算来年度以降のより適正な予算執行に向けた検討が行われている。また、予算に関連して、日本学術会議予算の制約から分科会開催が制限されている現状を踏まえ、以前に比べ委員会の数が多くなっているため、各分科会について、第 25 期での存続・統合等を検討していくことの要請があり、検討していくこととなった。

- ・ 第二部拡大役員会の設置について

第二部がカバーする学術分野や傘下の分科会の活動に関する情報共有と連携を目的として、第二部の役員と分野別委員会委員長、関連学協会連合体代表者による会合を、第二部拡大役員会として定期的に開催することが承認され、本年度中に第一回を開催する予定。

長野委員より以下のように質問（確認）・提言等がなされた。

- ・ 25 期の会員推薦に関して、推薦に際し業績等を考慮するようにということはあったが、23 期 24 期の時にあったように男女比率については考慮しなくてよいのか？

— これまで 3 割確保をできるだけ行うようにしてきており、25 期においても同様に考えている。ただし、分野によってはどうしても女性を 3 割まで出せないところもあるので、そのようなケースも考慮する。また、地方会員の積極的登用も考えている。なぜなら、地方では本会議が認識されにくくなってきているため、各地方で責任を持てる人を作っていきたいという意図があるからである。

- ・ 予算は毎年逼迫して苦慮することが続いているが、抜本的に考え直すことはしないのか？

— それは考えているが、委員も替わっていくため改革の必要性を引き継いでいく必要がある。

- ・ これまでの経験から 2020 年 1 月には、提言などが一度に多数出てくることになる。そのため査読しきれない状況に落ち入るであろう。以前の提言と内容が矛盾するケースも見られたことから、そのような状況に対し対処する必要があるのではないか？

— 今回は、できる限り早く提出するように伝達するとともに、期限を早めに設定し、査読に時間的余裕を確保することとした。なお、提言は、質が違う、レベルの違うものが混在するので、それを整理しながら査読する必要がある。

- ・ 前回の議事録に、看護師の調剤権付与の可能性が記されているが、これは薬学としてはゆゆしき問題ではないのか？

— 在宅医療を考えると、その場合に看護師にも調剤権を与えないとうまく医療が回らないという意見から、トレーニングが始まっているが、薬剤師免許を持たない者が本当に調剤をしてよいのか十分な議論が必要なのはもちろんである。現在、望月委員を中心に対処等を考えていただいている。

委員会を一つ作るのなら一つは減らすというのはどうか？（嶋田委員長）
基本的な考え方として、必ず残すべき委員会については決めておく必要あり。

ジェンダーバランスは日本全体の問題である。女性はたくさんの委員を頼まれていて気の毒な面もある。数合わせを考えるよりは、仕組み作りがより重要なのではないか。

（３）活動年次報告

内容が確認された。

（４）土曜日・日曜日及び祝日における講演会、シンポジウム等の開催について

土曜日・日曜日及び祝日のシンポジウム開催は困難を伴うので避ける。

（５）化学・物理系薬学分科会次回シンポジウムについて

シンポジウムのタイトル、内容、時期、会場について多くの議論がなされた。

タイトル：

タイトルは重要でありキャッチーなものにしておいた方がよいという意見から、以下の案が出され、出席委員の賛同のもと決定された。

「モダリティーが切り拓く次世代創薬」

内容：

内容について再度議論がなされたが大きな変更はなく進めることとなった。資料 5-1 にあるように、6 名の講演者からなる提案がなされていたが、5 名程度からの講演が適当であるとの意見から、5 番目の抗体薬物複合体については次点とし、他の 5 件のうちどれかが埋まらなかったときに加えるということとなった。候補講演者に対しては以下のように依頼する委員が決められた。

落谷先生、和田先生→真鍋委員（のち永次副委員長に変更）、飯倉先生→徳山委員、新井先生→長野委員、遠藤先生→加藤委員

時期・会場：

2020 年 10 月から 25 期となることを鑑み、10 月は分科会が立ち上がっていないためむずかしく 11 月から 1 月上旬が適切と考えられたが、本会議場が 2020 年 11 月から工事に入る可能性が指摘された。そのため、場所は本会議場を第一に考えるが 11 月から工事が入った場合には、日本薬学会会長井記念館のホールとする（日本薬学会と共催が条件）こととし、検討することとした。

候補日を以下のように挙げ、講演候補者に都合をうかがうこととなった。

2020 年 11 月 24 日、26 日、12 月 8 日、12 日

上記の日にちに関して嶋田委員長が薬学会に長井記念館の使用の可否を問い合わせることにした。

シンポジウム準備の進捗に関する情報は、随時担当の眞鍋、徳山委員にフィードバックすることとなった。

（7）次回分科会の開催について

次回は 5 月あるいは 6 月に開催し今期のまとめを行う予定である。日程について検討し、以下の日程の中で日程調整の上決定することとなった。

2020 年 5 月 25 日、6 月 1 日、5 日、8 日、11 日、12 日